

カフカのテキスト『城』における「お見通し」発言

西 嶋 義 憲

0. はじめに

フランス・カフカ (Franz Kafka) の作品には「お見通し」発言とでも呼ぶべき発話が見られることがある。「お見通し」発言とは、通常、直接には知りえない、対話相手の思考内容などの内面世界を話者が「見通し」(durchschauen)、それを断定的に叙述する、文法的には破格用法の発話のことである。このような発話は、対話相手に対して権力・支配力で勝っていること誇示したり、あるいは話題の転換ないし展開を促すなどの特殊な修辭的機能をもっているように思われる。本稿では、長編小説『城』(*Das Schloß*) におけるその使用例を分析し、その機能を明らかにする。

1. 導入

カフカ作品の会話には一見、奇妙に感じられる発話が散見される (西嶋 2005)。そのうちの一つに、対話相手の思考内容を読み取り、それを二人称主語を用いて断定的に叙述するタイプの発話がある。そのような発話は、他者である対話相手の思考を前もって知ることは認識論上不可能であるため、日常的に考えれば奇妙といえる (益岡 1997, 東郷 2002, ザトラウスキー 2003, 西嶋 2004)。もちろん、相手の考えていることについて質問したり、確認をとったり、あるいは推測したりすることは十分可能であるが、それを相手に向かって断定的に表現するのは文法的に言えば破格の用法であり、おかしい印象を与える。このような発話は、相手の考えていることが話者にはわかっていること

を伝える、すなわち、「お見通し」であることを示唆するものなので、「お見通し」発言と呼ぶことにする（西嶋 2004, Nishijima 2005, 西嶋 2008）。

カフカ作品における「お見通し」発言の具体的使用例については、ある会話の断片以外に、これまで『判決』（*Das Urteil*）と『流刑地にて』（*In der Strafkolonie*）においてその用例が確認できた（西嶋 2004, Nishijima 2005, 西嶋 2008）。これらの用例は、機能としては、対話相手の思考内容を見通し、それを先取りして断定的に表明するという意味で、話者と対話相手の関係を明示するものである。すなわち、対話相手に対して権力・支配力の点で、話者は相手よりも上位に位置づけられていることを示す手段といえる。事実、『判決』と『流刑地にて』の例では、対話者間で支配力もしくは権力に差があり、対話者間でそれを確認したり、それが移行する場合にこの「お見通し」発言が効果的に用いられている。

この点を、上記 2 作品に即してもう少し詳しく見てみよう。『判決』では、父子関係が主題となっているが、まず前半部において主人公ゲオルクが家庭内で主導権ないし支配力をもっているように描かれる。ところが、後半部で、ゲオルクが弱った父親の部屋に行くと、その力関係が逆転する。すなわち、父親が息子の思考内容を「お見通し」発言を用いて断定的に表明し、そのとたん、主導権は父親に移行してしまう。同様に『流刑地にて』では、士官と調査研究者との間の地位の差が問題となる。前半部では、士官が研究者に対して支配力をもっているように描かれるが、後半部では研究者のほうに支配力があることが「お見通し」発言の使用によって判明する。

Nishijima(2005)で『判決』における「お見通し」発言の使用例を確認した後、「お見通し」発言の調査をさらに『流刑地にて』に拡大した理由については、カフカが当時考えていた短篇集の出版構想とかかわっている（西嶋 2008）。カフカが構想していたのは、(1)『判決』・『変身』（*Die Verwandlung*）・『火夫』（*Der Heizer*）と(2)『判決』・『変身』・『流刑地にて』の二とおりの組み合わせによる短篇集の出版であった。前者と後者はそれぞれ「息子たち」（*Die Söhne*）と「罪」（*Strafen*）というタイトルがつけられるはずであった。このことからわかるように、両短篇集の出版計画の背景にはそれぞれに共通する

テーマが想定されていた。「息子たち」というテーマも「罪」というテーマも、そこには共通して権力ないし支配力の差が潜んでいるように思われる。もしこれらの作品において共通して登場人物間に権力や支配力の差が基本的に認められるとするなら、それを明示する手段として「お見通し」発言が使われている可能性があると推測できる。そこで、このような仮説のもと、まず『流刑地にて』を調査してみたわけである（西嶋 2008）。そしてつぎに、まだ調査されていない他の二作品『火夫』と『変身』の調査を試みた。その結果、この二作品には「お見通し」発言がまったく使われていないことが判明した（西嶋 2008a）。その理由としてさしあたり考えられるのは、『火夫』については支配力の差がテーマ化されていないということであり、また、『変身』については、巨大な害虫に変身してしまった主人公と家族間でそもそもコミュニケーション自体が成立していないことであろう。

本研究では、これらの分析をもとに、調査対象をさらに他のカフカ作品にも広げ、そこでの「お見通し」発言の使用の有無を検討し、使用されている場合はその用法を確認する。調査するのは、権力との戦いが主題になっているとされる長編小説の『城』（*Das Schloß*）である。『城』は、主人公の自称測量士のKが、城村のさまざまな人物（とくに女性）に取り入って居場所を見つけ、さらに城の権力者である役人に会おうと試みる物語である。ここでは、登場人物間の力関係の差が浮き彫りになる。最初は住民に対して弱い立場であるが、その関係は物語の進展とともに変化する。その変化が「お見通し」発言によって効果的に明示されている可能性がある。本研究の目的はこの仮説を検証することにある。

2. 調査方法

「お見通し」発言の具現形式として主語の意志を表わす話法の助動詞 *wollen* に着目する。作品内の会話に現われる二人称主語 *du* および *Sie* に支配された *wollen* を含む、平叙文による発話が対象となる。その際、疑問文という形式であったり、*wahrscheinlich*、*vielleicht*、*wohl* といった推量を表わす副詞を含

む発話は除外する。したがって、つぎのような要件をみたした発話が対象である：

- ・話法の助動詞 *wollen* を定動詞とする平叙文
- ・二人称主語 (*du* もしくは *Sie*) を主語とする
- ・推量を表わす副詞を含まない

なお、調査に使用したテキストは校訂版の『城』である：

Franz Kafka: *Das Schloß*. Herausgegeben von Malcom Pasley,
Kritische Ausgabe, Frankfurt/M.: Fischer Taschenbuch Verlag,
2002.

3. 結果および考察

今回の調査において、上記の条件との関連で「お見通し」発言と見なしうる用例は少なくとも9例見つかった。その9例のうち、最初の2例と中盤の1例の計3例において主人公のKに対して他の登場人物が「お見通し」発言を使用している。それ以外の6例では、Kが他の登場人物に対して「お見通し」発言を発している。したがって、力関係についていえば、「お見通し」発言の使用はKが他の登場人物よりも多く、また、その使用は前半より後半に集中しているので、傾向として、前半はKが弱い立場にいるが、後半になるとKが比較的強い立場になることがわかる。なお、すべての調査結果は対応する複数の日本語訳とともに論文末に掲げてある。ここでは、英訳・和訳を参考にしながら用例を一つずつ確認していく。

その前に、登場人物間で相手の考えていることが「お見通し」であることを指摘する発話文が見つかったので、それから話を始めよう。それによって、「お見通し」状態を明示することの重要性が確認できるからである。問題の箇所を引用する。フリーダ (Frieda) と K (K.) との会話である：

„Ich weiß nicht was Sie wollen“, sagte sie und in ihrem Ton schienen diesmal gegen ihren Willen nicht die Siege ihres Lebens, sondern die unendlichen Enttäuschungen mitzuklingen, „wollen Sie mich vielleicht von Klamm abziehen? Du lieber Himmel!“ und sie schlug die Hände zusammen. „Sie haben durchschaut“, sagte K. wie ermüdet von soviel Mißvertrauen, „gerade das war meine geheimste Absicht. Sie sollten Klamm verlassen und meine Geliebte werden. Und nun kann ich ja gehn. Olga!“ rief K., „wir gehn nachhause.“ (p. 64、下線は論者による)

この場面を簡単に説明しよう。フリーダが K に対して、「あなたのしようとしていることがわからない」と言いながらも、「ひょっとしたらクラムから私を引き離そうとしようとしてるんじゃないの」と指摘する。それに対して、下線部で「お見通しだったのか」と応じ、自分の意図を明かす。この後、K はフリーダのいる宿屋に宿泊できるようになる。

このように、フリーダが K に対して、K の目論見が「お見通し」であることを指摘し、それによって話が急展開することになる。その意味で、相手の考えていることを「お見通しだ」と指摘することが登場人物間の人間関係の確認や状況の変化に深く関わっている可能性があることがわかる。

3.1. 女将 (Wirtin) と K

「女将との最初の会話」(Erstes Gespräch mit der Wirtin) というタイトルのつけられた章に「お見通し」発言とみなしうる表現が認められた。K に対する女将 (Wirtin) の発言である：

Sie sind paar Tage im Ort und schon wollen Sie alles besser kennen, als die Eingeborenen, besser als ich alte Frau und als Frieda, die im Herrenhof so viel gesehn und gehört hat. (p. 84)

下線を施した文が「お見通し」発言に相当する(以下、同様)。すなわち、女将

がKに対して二人称主語を用いて、土地の人よりもすべてについてよりよく知っていたいという、Kの意志を断定的に表現している。この「お見通し」発言が示唆しているのは、女将がKよりも立場に関して上位にいるということ、すなわち支配力をもっているということであろう。

なお、この発話は英語と日本語では、それぞれつぎのように訳されている*：

... and already you think you know everything better than people who have spent their lives here, better than an old woman like me, and better than Frieda, who has seen and heard so much in the Herrenhof.
(p. 66)

……それでもう何だって知っているみたい。生え抜きの者よりも、わたしのような年寄りよりも、貴紳荘でいろんなことを見たり聞いたりしてきたフリーダよりも、よく知っているつもりでいる。(p. 85)

英訳・和訳とも、対話相手のKの思考内容を指摘している。その意味で、「お見通し」発言として機能するように訳されていることがわかる。

3.2. フリーダとK

「教師」(Der Lehrer) というタイトルの章にはつぎのような「お見通し」発言が見られた。フリーダがKに向かって話している場面である：

Und wenn Du kein Nachtlager bekommst, willst Du dann etwa von mir verlangen, daß ich hier im warmen Zimmer schlafe während ich weiß, daß Du draußen in Nacht und Kälte umherirrst. (p. 150)

紳士館(Herrenhof)という宿屋の給仕フリーダがKに対して発した言葉である。Kがフリーダにしてもらいたいと考えていること、そのためにKが犠牲になる覚悟をもっていることを断定的に語っていることがわかる。この発言によ

って、K よりもフリーダが立場上、上位に位置づけされていることがわかる。そしてこの後、K は校務員役を引き受ける決心をして次のように言う：

Dann bleibt nichts übrig, als anzunehmen, komm! (p. 150)

K は自分の考えていることをフリーダから「お見通し」発言によって指摘され、それを受けて自分の意図をフリーダの意向に沿うように変化させているようにみえる。この場面での K の心境の変化について、辻(1971: 154)はつぎのように述べている：

K は寒風の吹きさらす屋根裏部屋に、シャツのままでひき入れられているというのに、フリーダは興奮のあまりそれに気づかず、「……あなたが夜の寒さのなかをさまよい歩いているのが、わたしにはわかっているのに、そのわたしには、ここのあたたかい部屋で寝ているように、とおっしゃってるようなものなんだわ」と悲痛な愛の口調で演説をぶって聞かす。K は寒くてたまらず、ちょうどこの個所で口説いておとされる。それが、絶対に拒絶しようと心がけていたにもかかわらず、K が村の学校の小使役を引き受ける転機になってしまうのである（第七章）。

このように「お見通し」発言は相手との関係を規定するだけでなく、話を展開させる重要な役割を担っていることがわかる。

なお、本節の「お見通し」発言は、英語と日本語ではつぎのように翻訳されている：

... do you really expect me to sleep here in my warm room while I know that you are wandering about out there in the dark and cold? (p. 120)

あなたに寝る場所がないというのに、わたしにはここで寝ろというの。あなたが夜と寒さのなかで行き迷っているというのに、どうして暖かい部屋

に寝ていられるの (p. 149)

英訳・和訳とも、修辞疑問にせよ、疑問文の形式をとっている。この訳文では、「お見通し」発言としては解釈されていない。断定的に表現していないからである。

3.3. K とフリーダ

助手 (Die Gehilfen) の章では、K がフリーダに対して「お見通し」発言をする場面が見られる：

Aber auch Du willst hier bleiben, es ist ja Dein Land. (p. 215)

ここでは、K がフリーダに対して、ここに居続けるという相手の意志を断定的に表現している。それ以前は、フリーダが K に対して立場上、上位にいたわけだが (3.2.を参照)、この発言によって立場が逆転していることがわかる。

なお、英語と日本語の訳はつぎのとおり：

But you want to stay here too, after all, it's your own country. (p. 177)

きみだってここにとどまりたい。ここはきみの土地だ。 (p. 211)

日・英両翻訳とも、「お見通し」発言として訳されている。

3.4. K とオルガ (Olga)

16 章の中では、つぎのような発言が認められた：

Du willst doch nicht scherzen; wie kann über Klamms Aussehen ein Zweifel bestehn, es ist doch bekannt wie er aussieht, ich selbst habe ihn gesehn. (p. 276)

Kがオルガ (Olga) に対して、相手が冗談を言うつもりがないというオルガの考えを断言している。したがって、オルガの意図を「お見通し」していることで、Kは立場上、上位にあることがわかる。

なお、当該部の英訳と日本語訳はつぎのとおりである：

... you surely must be joking; (p. 226)

冗談を言いたいのかい。(p. 260)

英語は、*surely*と*must*によって、推量を表現していることがわかる。日本語は、疑問文形式になっている。したがって、両翻訳とも、「お見通し」発言としては訳出されていない。

3.5. Kとオルガ

アマーリアの秘密 (Amalias Geheimnis) の章でもオルガに対してKは「お見通し」発言をしている箇所がある。

Ich nehme nicht an, daß Du das mit Absicht oder gar mit böser Absicht tust, sonst hätte ich doch schon längst fortgehn müssen, Du tust es nicht mit Absicht, die Umstände verleiten Dich dazu, aus Liebe zu Amalia willst Du sie hocherhaben über alle Frauen hinstellen und ...

(p. 312)

オルガが他のどんな女よりもアマーリアが優れていると見ようとしているという意図をKが断言している。このように、相手の考えを明示することによって、立場上、上位に位置づけられていることを示唆していることがわかる。つまり、Kがオルガに対して支配力をもっているのだ。

対応する英語と日本語の訳文はつぎのとおり：

... impelled by your love for Amalia, you want to exalt her above all other women, ... (p. 254)

アマーリアが好きだから、どの女よりも高くもちあげようとして、アマーリア自身にはこの目的に足りる十分なものがないから、それでほかの女を貶めて埋め合わせをするんだ。(p. 290)

英・日とも「お見通し」発言として理解可能な訳である。

3.6. イエレーミアス (Jeremias) と K

21章ではかつてのKの助手であったイエレーミアス (Jeremias) がもと「主人」のKに対して「お見通し」発言を繰り返している箇所がある。

„Diese Drohungen schrecken mich nicht“, sagte Jeremias, „Du willst mich doch gar nicht zum Gehilfen haben, Du fürchtest mich doch als Gehilfen, Du fürchtest Gehilfen überhaupt, nur aus Furcht hast Du den guten Artur geschlagen.“ (p. 374)

イエレーミアスは、話法の助動詞 *wollen* を用いて「お見通し」発言を行なっている。Kに面と向かって、イエレーミアスは自分を助手として採用しようとはまったく思っていないと指摘している。この表現で、Kよりもイエレーミアスのほうが支配力の点で上位にいることが示唆される。したがって、表現を見る限り、助手であった時期と立場が完全に逆転している。なぜイエレーミアスは、Kの助手でなくなったとたん、Kに対して「お見通し」発言を使えるようになったのか。「城」やフリーダとの関係が強くなったので、Kに対して支配力をもつようになったのだろうか。その理由は不明である。

英語と日本語の翻訳はどうなっているのだろうか。

“These threats don’t frighten me,” replied Jeramiah, “you don’t in the

least want me as an assistant, you were afraid of me even as an assistant, you were afraid of assistants in any case, ...” (p. 301)

「そんな脅しにはのりませんよ」

と、イエレーミアスが言った。

「わたしを助手にもちたくなかったんだ。助手のわたしを恐がっていた。助手そのものを怖れていた。恐いもんだから人の好いアルトゥーアを殴ったんだ」 (p. 337)

英訳では、*want* によって要望を断言しているので、「お見通し」発言といえる。他方、日本語は、過去のこととして訳出している。相手の考えを過去のこととして主張する表現形式（「…たんだ」）を用いているため、「お見通し」発言としては理解しにくい。

3.7. K とペーピ (Pepi)

25 章では、K がペーピ (Pepi) に対して「お見通し」発言をしている。

Du willst ihr nicht glauben! Und weißt nicht wie Du Dich damit bloßstellst, wie Du gerade damit Deine Unerfahrenheit zeigst. (p. 483)

K がペーピに対して支配力の点で上位にいることを確認していることになる。対応する英語と日本語をみてみよう。

You won't believe her! (p. 396)

きみはフリーダを信じたくないのだ！ (p. 417)

英・日ともドイツ語に対応し、まさに「お見通し」発言として理解できる。

3.8. K と女将

同じく 25 章では、K は女将に対して「お見通し」発言をしている。

Du willst es wissen. Nun sie sind aus gutem Material, recht kostbar, aber sie sind veraltet, überladen, oft überarbeitet, abgenutzt und passen weder für Deine Jahre, noch Deine Gestalt, noch Deine Stellung. (p. 493)

K が女将に対して、服のことを知りたがっていることを断定的に述べているわけだが、これによって、立場が上であることを表明している。それ以前では、女将のほうが上位に位置づけられていた (3.1. を参照)。

英語と日本語の訳文はつぎのとおりである：

You insist on hearing. (p. 403)

知りたいのですね。(p. 425)

英語は相手の要求を表わし、日本語は相手の考えを確認しようとしている。したがって、両表現とも「お見通し」発言とみなすことはできない。

3.9. K とゲルステッカー (*Gerstäcker*)

25 章ではさらに、K はゲルステッカー (*Gerstäcker*) に対しても「お見通し」発言をしている。

„Ich weiß warum Du mich mitnehmen willst“, sagte nun endlich K. Gerstäcker war es gleichgültig, was K. wußte. „Weil Du glaubst, daß ich bei Erlanger etwas für Dich durchsetzen kann.“ (p. 495)

K がゲルステッカーに対して相手の考えていることを *ich weiß* を用いて表明し、

その理由も *Du glaubst* という表現で断言しているので、まさに「お見通し」であることを表明している。事実、この箇所は池内紀によってつぎのように訳されている（特に下線部に注意）：

「どうして連れていきたいのか、お見通しだ」

やっと K が言った。ゲルステッカーは平然としていた。

「おまえのため、わたしがエアランガーに何かやってのけそうだと、見当をつけたのだろう」（池内：426-7）

「お見通し」という表現が使われていることに注意してほしい。人間関係において、相手の考えていることはわかっていると指摘することの重大さがわかる。なお、この訳文では二つめの「お見通し」発言が、「お見通し」発言として訳されていない。推量を表わす表現がともなっているからである。

対応する英語はどうなっているだろうか。

“I know why you want to take me with you,” K. said at last. Gerstäcker did not know what K. knew. “Because you think I can do something for you with Erlanger.” (p. 407-8)

英語は、ドイツ語と同様に両発話とも「お見通し」発言と理解して訳されている。

*

以上、調査の結果を提示し、その説明を試みてきた。これらの結果から、『城』においても「お見通し」発言が効果的に用いられ、登場人物間の支配力の違いやその変化が示唆され、また、話の展開にある種のきっかけを与えていることがわかる。

4. おわりに

予想通りに、『城』においても「お見通し」発言が確認できた。また、それらは登場人物間の力関係の違いや移行を明示するために適切に使用されていることがわかった。さらに場面によっては、話がそれによって展開するきっかけになっていることもわかった。

『城』は、作品中に会話の占める部分が極めて大きい。クルーシェの研究によれば、長編三部作『アメリカ（失踪者）』（*Amerika*）・『審判』（*Der Prozeß*）・『城』の作品全体における会話の占める割合はそれぞれ、50～55%・60～65%・70～75%だという（Krusche 1974: 52）。このことから『城』では会話部分が多いことがよくわかる。したがって、会話のなかだけで状況の変化や状態がすべて理解できるようになっている必要がある。会話において、登場人物間の位置づけをも理解させようとするなら、そこには、力の差を示す表現が要求されるわけだ。そのための手段として「お見通し」発言も使われていると考えることができるだろう。

注*

和訳は校訂版による池内紀訳を用いた。英語の翻訳はつぎの文献によった。ただし、この翻訳が依拠しているのは、校訂版ではなく、従来の M.Brod 版である。

Franz Kafka: *The Castle*. Definitive Edition. Translated by Willa and Edwin Muir with additional materials translated by Eithne Wilkins and Ernst Kaiser. With an Homage by Thomas Mann. New York: Vintage Books, 1974.

文献

- ・Krusche, D.: *Kafka und Kafka-Deutung*. München: C. Hanser, 1974.
- ・益岡 隆志:「表現の主観性」. In: 田窪行則編:『視点と言語行動』. くろしお

出版, 1997, 1-11.

- 西嶋 義憲：『『お見通し』発言による対話展開の原理 —カフカの対話断片テキストを例にして—』. In: 金沢大学外国語教育研究センター『言語文化論叢』第 8 号, 2004, 155-168.
- 西嶋 義憲：『カフカと通常性 —作品内対話における日常的言語相互行為の「歪み」—』. 金沢大学経済学部叢書 15, 金沢: 金沢大学経済学部, 2005, vi, 198p.
- 西嶋 義憲：「カフカのテキスト『流刑地にて』における『お見通し』発言 —『判決』との構造的類似性の分析—」. In: 金沢大学外国語教育研究センター『言語文化論叢』第 12 号, 2008, 77-100.
- 西嶋 義憲：「カフカと『お見通し』発言 —『変身』と『火夫』の場合—」. カフカ研究会九重集会研究発表原稿: mimeo, 2008a.
- Nishijima, Y.: „Durchschauende Äußerung im Dialog von Kafkas Werken“. In: 『文体論研究』第 51 号, 2005, 13-24.
- ポリー・ザトラウスキー：「共同発話から見た『人称制限』, 『視点』をめぐる問題」. In: 『日本語文法』第 3 巻第 1 号, 2003, 49-66.
- 辻 理：「『城』」. In: 辻理編：『カフカの世界』. 荒地出版, 1971, 137-157.
- 東郷 雄二：「フランス語と日本語の感覚・感情述語 —『わがこと』と『ひとつと』考」. In: 『フランス語教育』第 31 号, 2002, 61-70.

ANHANG

テキストは校訂版を用いている（本文参照）。翻訳の略号はつぎのとおり：

- 「旧新」：『カフカ全集 I 城』（辻 理・中野孝次・萩原芳昭訳），新潮社, 1953.
- 「世文」：『世界文学大系 58 カフカ』（原田義人訳），筑摩書房, 1960.
- 「新新」：『決定版 カフカ全集 6 城』（前田敬作訳），新潮社, 1981.
- 「池内」：『カフカ小説全集③ 城』（池内 紀訳），白水社, 2001.

前三者は M.Brod 編集の『城』に基づく翻訳である。4 つ目は、校訂版にもとづいている。

[Erstes Gespräch mit der Wirtin: Wirtin zu K.]

Sie sind paar Tage im Ort und schon wollen Sie alles besser kennen, als die Eingeborenen, besser als ich alte Frau und als Frieda, die im Herrenhof so viel gesehn und gehört hat. (p. 84)

- ①「あなたはここへ来てからまだ二日か三日にしかならないんですよ。それでいてあなたはもう何でもかでもこの土地の者よりよく知っていると思いたがっているんだ。…」(旧新：61)
- ②「あなたはここへきてまだ二、三日にしかならないのに、もうなんでもこの土地の者たちよりもよく知りたがるのね、…」(世文：165)
- ③「あなたは、この土地へ来てまだ三日か四日ほどにしかならない。だのに、もう土地の人間よりもなんでもよく承知しているようなことをおっしゃる……」(新新：61)
- ④「ほんの数日、ここにいただけなのに、それでもう何だって知っているみたい。…」(池内：85)

[Der Lehrer: Frieda zu K.]

Und wenn Du kein Nachtlager bekommst, willst Du dann etwa von mir verlangen, daß ich hier im warmen Zimmer schlafe während ich weiß, daß Du draußen in Nacht und Kälte umherirrst. (p. 150)

- ①「…、あたしにはこのあたたかい部屋に寝るように、とおっしゃってるようなものなんですわ」(旧新：109)
- ②「…、この暖かい部屋で自分だけで寝ている、とわたしに求めようとしてい

るようなものよ」(世文：194)

③「それに、あなたは泊るところがなくても、わたしにはこのあたたかい部屋で眠れとおっしゃるのでしょう。(…)」(新新：107)

④「あなたに寝る場所がないというのに、わたしにはここで寝ろというの。」(池内：149)

[Die Gehilfen: K. zu Frieda]

Aber auch Du willst hier bleiben, es ist ja Dein Land. (p. 215)

①「しかしあなただってここにしようと思っているんだろう、ここはあなたの故郷だからね。」(旧新：158)

②「でも、君だってここにとどまっていたいんだろうね。ここは君の故郷の土地なんだから。」(世文：221)

③「しかし、きみもここにとどまりたいだろう。なんと言ったって、きみの生れ故郷だからね。」(新新：154)

④「きみだってここにとどまりたい。ここはきみの土地だ。」(池内：211)

[K. blieb: K. zu Olga]

Du willst doch nicht scherzen; wie kann über Klamms Aussehen ein Zweifel bestehen, es ist doch bekannt wie er aussieht, ich selbst habe ihn gesehn. (p. 276)

①「冗談言っちゃいけないよ。…」(旧新：202)

②「冗談をいおうなんてしちゃいけませんよ。」(世文：246)

③「あんたは、まさか冗談を言っているのではないでしょうな。」(新新：196)

④「冗談を言いたいのかい。」(池内：260)

[Amalias Geheimnis: K. zu Olga]

Ich nehme nicht an, daß Du das mit Absicht oder gar mit böser Absicht tust, sonst hätte ich doch schon längst fortgehn müssen, Du tust es nicht mit Absicht, die Umstände verleiten Dich dazu, aus Liebe zu Amalia willst Du sie hocherhaben über alle Frauen hinstellen und ... (p. 312)

- ①「アマーリアへの愛情から、あなたは彼女を高くあらゆる女の上に据えたがっている、・・・」(旧新：230)
- ②「アマーリアに対する愛情から、あなたはあの人をあらゆる女たちよりも高いところに置こうと思っています。」(世文：262)
- ③「具体的に言うと、あんたは、アマーリアを愛しているので、すべて女たちよりも高いところに彼女をまつりあげたい。・・・」(新新：222)
- ④「アマーリアが好きだから、どの女よりも高くもち上げようとして・・・埋め合わせをするんだ」(池内：290)

[Nun war es also: Jeremias zu K.]

„Diese Drohungen schrecken mich nicht“, sagte Jeremias, „Du willst mich doch gar nicht zum Gehilfen haben, Du fürchtest mich doch als Gehilfen, Du fürchtest Gehilfen überhaupt, nur aus Furcht hast Du den guten Artur geschlagen.“ (p. 374)

- ①「だいたいあなたはこのわたしを助手に持ちたいなどと露ほども思っていないんでしょう、あなたには助手のわたしがこわいんでしょう、いったいに助手というものがこわいんでしょう、こわいからこそあのアルトゥールを殴ったんでしょう」(旧新：274)
- ②「あなたは私を助手にもちたいなんて全然思っていないんです。あなたは助手としての私を恐れているんです。あなたはおよそ助手というものを恐れているんですよ。ただ恐れからあの善良なアルトゥールのことをぶったんです」(世

文：289)

③「だって、あなたは、わたしを助手にしたいとおもってないんでしょう。助手になったら、わたしが怖ろしいんでしょう。だいたいからして、あなたは助手がこわいんだ。こわいばかりに、あの人の好いアルトゥールをなぐったんだ」(新新：264)

④「わたしを助手にもちたくなかったんだ。助手のわたしを恐がっていた。助手そのものを怖れていた。怖いもんだから人の好いアルトゥールを殴ったんだ」(池内：337)

[Als K. aufwachte]

Du willst ihr nicht glauben! Und weißt nicht wie Du Dich damit bloßstellst, wie Du gerade damit Deine Unerfahrenheit zeigst. (p. 483)

①「あなたはフリーダのことを信じようとはしないのだね！しかもそれでどんなに自分のぼろをさらけ出しているか、それでつまり自分の無経験さを示しているかには気がつかないんだ」(旧新：356)

②「君はフリーダのことを信じたくないんだよ！そして、それによって自分がどんなに自分をさらけ出しているのか、それによって君の無経験なことをどんなに示しているのか、知らないんだ！」(世文：336)

③「が、きみは、自分では気づいていないけれども、そのことによって自分の欠点をさらけだし、自分の未経験さをしめしているのだよ。」(新新：336)

④「きみはフリーダを信じたくないのだ！それで自分をまる裸にしていることが、世間知らずを暴露していることが、わかっていない。」(池内：417)

[Als K. aufwachte]

Du willst es wissen. Nun sie sind aus gutem Material, recht kostbar, aber sie sind veraltet, überladen, oft überarbeitet, abgenützt und passen weder

für Deine Jahre, noch Deine Gestalt, noch Deine Stellung. (p. 493)

①「そんなにお知りになりたいんですか。じゃあ申し上げます、これは確かに、相当値のはったいい布地でできていますよ、が、ともかく流行遅れて、ごてごて飾り過ぎていて、たびたび修繕がしてあって、着古してあって、もうあなたの年にも、あなたの姿にも、あなたの地位にもふさわしくないんです。」

(旧新：363)

②「それを知りたいというんですね。それじゃあ、いいましょう。その服はほんとうに高価ないい生地できていますね。だが、もう古くさくて、ごてごて飾りすぎているし、何度も修繕してあり、着古していて、あなたの年にもあなたの姿恰好にもあなたの地位にもびったりしません。」(世文：340)

③「知りたいとおっしゃるのなら、申し上げます。あなたの服は、上等の布地でできていて、ずいぶん高価でしょう。しかし、時代遅れで、ごてごて飾りすぎて、何度も仕立てなおしをし、着古していて、いまではあなたのお年にも、あなたの容姿にも、あなたの地位にも似つかわしくありません。」(新新：343)

④「知りたいのですね。いい布地でできている。高価な服だが、古びていて、飾り立てていて、かなり手が入りすぎていて、着古して、あなたの年齢にも、からだにも、地位にも似合わない。」(池内：425)

[Als K. aufwachte]

„Ich weiß warum Du mich mitnehmen willst“, sagte nun endlich K.

Gerstäcker war es gleichgültig, was K. wußte. „Weil Du glaubst, daß ich bei Erlanger etwas für Dich durchsetzen kann.“ (p. 495)

①「あんたがなぜわたしを一緒につれて行きたがっているのか分っているよ」と、とうとう K は言った。しかし K に何か分っていようがゲルステッカーは頓着しなかった。「わたしがエルランガーに頼んで、あんたのために何かして上

げられる、と思ってるからさ」(旧新：428-429)

② --- (世文：当該箇所なし)

③「きみがなぜおれを連れていこうとしているのか、その理由はわかっているぜ」とKはどうとう言った。

ゲルステッカーは、Kになにがわかっていようが、どこ吹く風であった。

「おれがエルランガーに言って、きみのためになにかしてやれることがあるとおもっているからだろう」(新新：405)

④「どうして連れていきたいのか、お見通しだ」

やっとKが言った。ゲルステッカーは平然としていた。

「おまえのため、わたしがエアランガーに何かやってのけそうだと、見当をつけたのだらう」(池内：426-7)